閲覧用

「《触覚のテーブル》ワークショップ」

振り返りトーク

本展開催に先立ち、2024 年 5 月 19 日に実施した
今村遼佑と光島貴之による共同作品《触覚のテーブル》
（2024）を用いたワークショップのゲスト・伊藤亜紗氏と
出展作家による振り返りのトークを、抜粋してご紹介します。
トークは、関係者のみにて、ワークショップの後日に行いました。
ぜひお手に取ってお読みください。

今村遼佑×光島貴之 感覚をめぐるリサーチ・プロジェクト
〈感覚の点Ｐ〉展 プレイベント「《触覚のテーブル》ワークショップ」
振り返りトーク　※抜粋

ワークショップ実施日：2024 年 5 月 19 日

話し手：伊藤亜紗（東京科学大学 教授）
今村遼佑（出展作家）
亀井友美（光島貴之制作アシスタント）
高内洋子（アトリエみつしまマネージャー、光島貴之制作アシスタント）
光島貴之（出展作家）
門あすか（東京都渋谷公園通りギャラリー）
※50 音順、敬称略

***

○門　　今日は《触覚のテーブル》ワークショップの振り返りとして、伊藤亜紗さんにお聞きしたいことを、今村さん光島さんにはキーワードでご用意いただいています。どうぞよろしくお願いいたします。

○今村　僕は、１つは、主に僕と光島さんがやっているプロジェクトに関するキーワードかなと思うんですけど、**「開くこと」と「閉じること」**。このプロジェクト自体が、僕と光島さんだったり、その周りの人たちという、どっちかというと小さい規模での活動になっているんですが、それがある閉じ方をしているんですけど、でも、閉じているだけというわけでもないような気がするというか。もともとこの展覧会自体が結構個々に作品を制作しているという状態で、個人の閉じているものを公に公開するということがあったりするので、基本的には閉じていることと開いているということは通じているのかな。でも、時々自分がそこから疎外されているような、何か内輪のノリに感じるような展覧会も実際あるにはあるというか、何かその辺の話を。
　あと、それともちょっと関係するんですけど、２つめは、**「共同作業すること」と「個人の作業」**の関係性が今ちょっと気になっていることです。
　最後は、一くくりで語ることというか、**「大きく語ること」と「小さく個別で語ること」**。それは「開くこと」と「閉じること」とか、共同することと個人の制作とかとも関わってくるかなと思うんですけど、そのような３点、キーワードで考えました。

○門　　光島さんは、いかがですか？

○光島　まずは、伊藤亜紗さんの本を割とよく読んでいるほうだと自分では思っているんですけれども、初期の頃から疑問に思っている点が１つあります。それは**「目の見えない人」という言い方**をしますよね。これは別に伊藤さんだけじゃなくて、いろんな人が、見える人が見えない人を言うときに「目の見えない人」と。ぼくがどこにこだわっているかというと、「目の」というところにこだわってしまう。そういうことを言う人はあまりいないかもしれないんですけど、ぼく自身は自分のことを「見えない人」、「ぼくは見えないんですけど」という言い方が一番日常的な会話の表現なんですけども、見える人が使うときには「目の見えない人」というふうに言うし、ぼくの周囲の人もそう言うんですけど、ずっと何か違和感があって。なぜだろうかと思って考えていて、ちょっと気がついたのが、ぼく自身にとっては、「見えない」と言うときに、「目が見えない」というのはもう普通に当たり前のこととして、「目」というのは言わなくても「見えない」ということの中に含まれているんですけれども、普通に見える人が言うときには、「目が見えない」、「目が見えない白鳥さんのどうのこうの」とかという言い方になるんですよね。
　やっぱりそれは、「見えない」という表現が「目が見えない」ということもあるし、「色が見えない」ということもあるし、「見えない」というところにいろんな意味が含

まれているんだろうな。だから、見える人が使うときには、「絵が見えない」とか「目が見えない」というふうに、「わざわざ言わないと通用しないということなんだな」というふうにやっと最近気がついて。結局、自明なこととして「見えない」ということをぼくが思っているのと、一般の人が「見えない」と言うときには「目が見えない」というふうな言い方をする、そのギャップみたいなものを感じている。そこを何か作品として考えていくときに、ぼくは普通に「見えない」という立場から何かを作ったりするんですけど、もう一歩、見える人が「目が見えない」というような雰囲気をぼくの中にちゃんと含めて作らないと分かってもらえないんだろうなという気がしています。

○伊藤　ありがとうございます。

○光島　もう１つは、最近、昨日の夜も読んでいたんですけど、『手の倫理』という本が一番内容的にぼくはしっくりきていて、そうだなというところがすごく多かったんです。その中でやっぱりちょっと迷ってしまうのが、「さわる」ということと「ふれる」ということの違いを言っておられて。ぼくの場合、やっぱり「さわる」というほうを自然に使っていて、「ふれる」とか「ふれ合う」というのはちょっと、何だろうな。本でも言っておられることなんですけど、心とか感情とか、そういうことが混じってきていて、さらに深い感覚の交流というような意味合いがあって使われている。そう言われてみたらそうなんですよね。ただ、ぼくとしては、「ふれ合い」と言うときに、例えばぼくとスタッフとか、今村さんとの関係でもそうなんですけど、例えば日常的に手引きをしてもらって歩いたりとか、作品を作るときに協力してもらったりとか、いろんな形でふれ合うという深い関係のところは確かにあるし、共同で何かを一緒にやっているという感覚はすごくあるんですけれども。そこで「ふれ合う」という言葉を使ってしまうと、ちょっとずぶずぶといってしまうので、もうちょっと距離を置いて、やっぱり「さわる」ぐらいの感覚で置いておきたいなというのが自分の中にあったりします。

仕事でいうと、ちょっと距離を置いておきたいところとかもあったりする。そんなつながりがそれぞれあるんですけど、何かその辺の距離の取り方みたいなところが、多分「さわる」とか「ふれる」とかいうことなんだろうな、というふうなことを考えながら読ませていただきました。多分そのことが、今村さんからもあったけども、何か一緒に、これからもまた来年に向けてやっていくときに、ある程度距離を置いておいたほうが、緊張感があっていいのかなと思っていたりするところなんですね。

その辺りで、伊藤亜紗さんがずっとこれまでやってこられた、ぼくは本からでしか知らないですけど、スポーツをやっている人とか、いろんな関係で、見えない人との関係とか身体の場合もあるかな、いろんな人との関係でいろんなことをやってこられていることと、ぼくが今村さんとの関係の中で何かやっていこうとしているところと、かなり一致点があると思っているんです。それはこの間のワークショップも経験していただいて、ある程度分かっていただいているかなと思います。じゃあ、今後、もうちょっと深めて、例えば今村さんと一緒にちょっとやってみた視覚障害者のスルーネットピンポンとか、庭を造るみたいなワークショップに参加したりとか、いろんな活動を並行してやってきているんですけど、何かそれをアートに近づける、アートに組み込むというか、アートの面白さとして伝えるときにどんな工夫があったらいいのかなとか、どんな注意点があったらいいのかなという、その辺りを率直にお聞きしたいなと思っています。

○伊藤　ありがとうございます。

最後に光島さんからあった距離感の話というのが、最初に今村さんがお話しくださった「開くこと」と「閉じること」とか、あと、共同作業と個人みたいなところとリンクしてくる気がするので、その辺りからお話を進めていくという感じでいかがですか。

○光島・今村　　はい。

○伊藤　私、ちょっと一時期、数か月前に谷崎潤一郎のことをずっと調べていたんですね。谷崎潤一郎ってすごくご馳走が大好きだったので、すごく血圧が高かったんですよ。

○光島　（笑）

○伊藤　（笑）血圧が高くて、晩年は手がしびれちゃったり、目があまりよく見えなくなっちゃって、自分で書けなくなったんですね。自分でペンを持って原稿用紙に向かえなくなったんですよ。彼からすると仕方なく口述筆記の人を雇って、それで文章を書くというふうに書き方を変えるんですよね。それまで１人でやっていたことを共同作業に切り替えるということをしたんです。それは彼にとっては結構大きいことで、１つは、彼にとってはペンを持つとか原稿用紙にさわるみたいな、結構触覚的、感覚的な刺激って大事だったみたいで、そういうものの刺激を受けながら小説ができていくみたいな、そういう思考方法をしていたので、それができなくなるという面ですごく大きかった。もう１つは、「書く」じゃなくて「しゃべる」という形になるので、相手に向けて自分の考えを言って、そこからまた次の文章を探すみたいな、書くことと文章が生まれてくることというのが前はセットになっていたのに、その中の「書く」が消えてしまって「しゃべる」に変わると、文章が生まれてくるということの仕組み自体もちょっとつくり変えなきゃいけなくなって、すごく書くのが難しくなるんです。そのときに彼はどういうふうに自分が１人でやっていた閉じたことを開いていったのかみたいな、何かそういうことをいろいろ調べていったんです。

その中で、彼が口述筆記を専門に頼んでいた方というのがいて、その方が伊吹和子さんという方なんですけど、その伊吹和子さんがめちゃくちゃ悩むんですよね。彼女は本を残しているので、その本に谷崎の口述筆記がいかに大変だったかみたいなことがたくさん書いてあるんですよ。ちょっと話が長くなっちゃうかもしれませんが、少し細かく話すと、まず谷崎の口述筆記のスタイルって、谷崎が文章を言います、それを書き取ります、その次の文章を待つときに、基本的に谷崎の顔をずっと見ていてほしいという。そういう、何か気持ち悪くないですか。（笑）

○門　　（笑）

○光島　嫌やな。（笑）

○伊藤　「僕を見て」みたいなスタイルなんですよ。

○光島・今村　　へえ。

○伊藤　だから、めっちゃ気まずいけどずっと待つ、みたいなことをその口述筆記の方はやるんですけど、次の文章がなかなか生まれてこないわけですよね。５分、６分どころじゃなくて30分とか数時間とか出てこなくて、ずっと待つみたいな状態なので、口述筆記をしている伊吹さんという方は、自分が悪いんじゃないかというふうに、もうちょっと違うやり方があるんじゃないかとすごく悩むんですよね。

彼女の中で３つぐらいオプションがあって。１個は完全にマシンになるというスタンス。言われたとおりただただ書くという。私はタイプライターになるというのが１個目のオプション。２個目のオプションが、共同制作者になるということで、それは谷崎の小説の最初の読者なので、ちゃんと反応を返す。「わー、面白いですね」みたいなことを返すとか、「さっきのはちょっと分かりにくいです」みたいなことを返す。ちゃんと人間としてリアクションをしたほうがいいんじゃないかという選択肢。３個目のオプションが、女性として対応する。伊吹和子さんは女性なので、谷崎はあえて伊吹さんに性的な表現とかを書かせているっぽいんですよね。想像がつくじゃないですか、そういうことをしそうだなって。（笑）

○光島　（笑）

○伊藤　あえて性的な表現とかを谷崎が自分に書かせようとしているのに、それをタイプライターみたいに書き起こしていたら、多分谷崎としては自分の当てが外れて、コミ

ュニケーションがうまくいっていないという感じがするから、あえて女性としてちょっと恥ずかしそうにするとか、そういう部分を出したほうがいいんじゃないかみたいな、そういう３つの選択肢ですごく悩むんですよね。

さっき光島さんが、「ふれる」というほうをずぶずぶいってしまうとまずいんじゃないかみたいな話があったと思うんですけど、多分その３つの選択肢のうち、１は一番「さわる」的なクールな関係なんですよね。２が適度な「ふれる」の状態で、人間的に、つまり相手によって自分の出方を変えるというのが「ふれる」なので、それが健全な「ふれる」的な関係かな。３つ目がずぶずぶいってしまった「ふれる」のケースで、これは、伊吹さんは、これをやったらもう自分の仕事が成り立たなくなるので、３は絶対やらないというふうに心に決めるんですよね。適度な距離を保とうと思って、３は考えるんですけど、そっちに行かないという選択肢をして。彼女の中でもどうやって共同作業をやっていくかということですごく悩みがあったんですよね。

ただ、すごく面白いのが、谷崎ってすごくお手伝いさんとかをたくさん使っていた。伊吹さんは口述筆記専門の、すごく文学の素養を持っている方なんですけれども、そうじゃなくて、ただの洗濯とか掃除とか食事とか、そういう純粋なお手伝いさんもたくさん家にいたんですね。そういうお手伝いさんがたまに口述筆記とかを手伝うこともあったようなんです。実はヨシさんというお手伝いさんがいて、このヨシさんという人が谷崎にとって実はすごく大事な人だったということが伊吹さんの文章から分かるんです。それはどういうことかというと、とある小説の一番大事なシーンが、ちょっと省略しますけれども、女性の足の裏の型を取るというのが一番大事なクライマックスのシーンなんですね。女性の足の裏にインクをつけて、それを色紙で取っていくというシーンがあるんですけど、そのシーンを試しているのが、実はヨシさんに対して試しているんですね、谷崎は。でも、ヨシさんはどういう人かというと、谷崎の芸術を一切理解していないし、全然興味もない人なんですよ。

○光島　はい。

○伊藤　そういう興味もなくて、自分に対する敬意とかもなくて、ある種掃除・洗濯の延長で口述筆記とかもやっているような人にこそ、実は谷崎は一番大事なことを一緒にやろうとしていて。これは伊吹さんからするとかわいそうで、伊吹さんは谷崎を理解しようとして、尊敬もしているし、すごく共感的なんですよね。一番共感がうまくいくところを探ろうとしているのに、一切そういう理解がない人にこそむしろ一番開いていたというのがあって。ちょっと一般化すると、**その人がやろうとしている意図を理解することが、必ずしも共同作業を一番オープンな形にするとも限らない**というんですかね。その人が、何かよく分からないけど一生懸命やっていると、何かやりたいんだろうなということだけは見えている。その状況にひたすら付き合うみたいなことが、もしかしたら介助とか、そういう場面でも結構大事なのかなと思うことがあって。やろうとしていることの価値を共有するとか、心の面を理解するということよりも、少し俯瞰して、離れて見守りながら、でも、その状況にじっと付き合うみたいなことのほうが、実はその人のサポートになるみたいなことがよくあるような気がするみたいなことを、ちょっとお話を伺って思い出しました。

○光島　何かその辺はぼくも心当たりがありますね。あまり言えないけど。（笑）

○今村　その話を聞いて思うのは、僕はすごく光島さんとはやりやすくて。というのは、僕と光島さんの関係性で言うと、お互いある程度自分のためにやっている部分があるというか、相手に寄り添う、相手のためにというんじゃないところがいいのかなということですよね。だから、お互い美術をそれぞれやっていて、それぞれ２人の作品のためにもなればいいし、展覧会がもちろんいいものになればいいなという同じ目的があってやれている部分もあるので。だから、そういう**共同作業としてはどっちかに寄り添わなきゃというのがないのがいいのかな**と、話を聞いて思いました。

○光島　そういうことで言うと、いろんな人とぼくもコラボレーションとか、今までい

わゆる健常者の作家の人とやってきているんですけども、初期の頃はやっぱり相手の人に対してのすごい競争意識みたいな、見える人に負けないようにみたいな感じとか、勝ちたいみたいな意識とか、そういうすごくアグレッシブな感覚を持ってやっていたことが多いと思うんですけど、最近、年のせいもあるのかもしれないけど、あまりそういうことを感じなくなってきて。でも、それはやっぱり相手によるんだろうなと思っていて、今村さんに関してはそういう変な競争意識みたいなものはあまり感じないので、ごく自然に今のところやれているというのが楽なんですよね。

○今村　うん。

○光島　というような感じですね。

○伊藤　ちなみに、さっき今村さんが、**それぞれ自分のためにやっているという延長の共同作業**だとおっしゃっていたんですけど、それはすごく面白いなと思っていて。今村さんにとっての「自分のため」の部分というのは、何か言語化できたりするようなものなんですか。

○今村　**僕自身がいろんな日常の感覚**――それは目から見る情報だったり、光景だったり、音だったり、匂いを使うときもあるし、あるいは、自分がどこかアーティスト・イン・レジデンスで滞在したときの体験だったりとかを作品にしたり――**いろいろ自分の経験してきたものから出てくる記憶とか感覚を使って作品化する**ことが多いんですけど、その発想だったりテーマの基になる感覚だったりの部分で、自分１人では出てこないインスピレーションとか、基本これまでの自分の中の発想だったりが、本当に子供の頃の自分からのものもあれば、もうちょっと人と話したりふれ合う中で獲得するインスピレーションだったりもあると思うんです。
　それを光島さんという**僕とちょっと違う感覚を持っている人と一緒にいろいろやってみる**ことで、よりその辺の**源みたいなものを見つけられたり、あるいは、豊かにできる**んじゃないだろうかというのがあったりします。

○伊藤　なるほど。ありがとうございます。
　この前のワークショップ（「〈感覚の点Ｐ〉展プレイベント」会期中の 2024 年 5 月 19 日に実施した《触覚のテーブル》ワークショップ）に参加してすごく楽しかったんですけど、何かワークショップという場だと、結構「分かる」ということに頑張りのベクトルが向いてしまいがちというのがあって。さっき今村さんがおっしゃったみたいに、**ある種自分で持ち帰ればいいんですよね。**自分で何か勝手に楽しいと思う部分を持ち帰ればいいんですけど、その手前で合意できるポイントを一生懸命探してしまうというところがある。だから、キャッチーなポイントだけをつかみがちというか、よくよく考えると、それって何か答え合わせをしているだけで、あまり増えていないんだよなと思うことがあります。例えばシルバニアファミリーの話があったじゃないですか。

○今村　はいはい。

○伊藤　あれ、すごく面白いし、あ、これがシルバニアファミリーかというようなギャップはもちろん面白いんだけど、よくよく考えると、受け取っているものは答え合わせというか、自分の知っている何かと、よく分からない、捉えどころがないふれる面、何て言ったらいいんだろう。物質。

○今村　はい。

○伊藤　それがリンクしたという安心感で、よく分からない、何とも言いようがない触り心地のほうにとどまるべきなのに、シルバニアファミリーと言われた瞬間すごく安心してしまった。私は安心しちゃって、これって逆の作業を本当はするべきなんじゃないかなというふうに、自分の中でちょっと反省をしたところがあって……。

○今村　確かにシルバニアファミリーの話は、出てきたことがすごい衝撃だったんですけど。でも、僕、ちらっと言ったんですけど、別の人がこれを触って、「私、これ、子供のときに何か大切に思っていたような気がする」と言って、それに別の人が「人形の何かみたい」なんて言って、さらに別の人が「シルバニアファミリー」と言うと、順を追って出てきたのはすごくよかったのかもしれない。

○伊藤　うんうん。

○今村　少なくともその３人が何かを、**全然他人なのに共感し合って、かつ、協力し合って何かを発見というか、その３人が感じているもやもやを言う**みたいな。

○伊藤　うんうん、なるほど。

○今村　だから、**その過程のほうが大事**だったのかなと。

○伊藤　うん、そうですね。だから、多分シルバニアファミリーと分かったところじゃなくて、**そこに行き着くまでとか、逆に行き着いた後とかのところがむしろ大事**なのかなと思っていて。私も参加している中で、何となくそれぞれの触覚のパネルをみんなで触って、それに対する記憶とかをどんどん乗っけていくじゃないですか。**みんなで共通の記憶をつくっていく**みたいな。これは食パンだよね、みたいな。それがだんだん積み重なっていくと、今度それ自体何か言語ができてきて、その食パン的なパネルを使って何か別のものを表現したりとか、そういうふうになってくると多分また違うんだろうなということも思って……

○光島・今村　　うん。

○伊藤　だから、シルバニアファミリーとか食パンで**納得して終わりじゃなくて、その先とかその手前が実は大事**なのかなって思いました。

○光島　そうですね。

○門　　ワークショップは、今村さんと光島さんとで２チームに分かれて行いましたが、自分が参加しているのとは別のチームがどうだったのかというのをみんな気にするのかなと思ったら、最後、多少共有したのもあるんですけど、案外気にしていなかった。しかも、軽くハイな雰囲気があって、これは何なんだろうなと。

○今村　ああ、そうですね。

○伊藤　でも、単純に何か手が興奮状態ですよね。

○門　　うんうん。

○光島　ああ、そうか。

○伊藤　さわることで刺激があって、手がすごくちくちくしているというか、ぱちぱちしているみたいな、ちっちゃい火花がずっと飛んでいるみたいな感じになっていました、私は。**手のひらが興奮状態**、ハイな感じという。

○今村　その表現は面白いですね。（笑）

○伊藤　（笑）

○光島　ぼくは何回も似たようなことをやっているから、そういうことにはならないんですけど、実は随分昔に高嶺格さんの作品の、ナビゲーターみたいなことを仙台でやったんですけど、そのときに……

○今村　ああ、光島さんもやっていたんですか、ナビゲーター。

○光島　ああ、ちょっとだけ。最初だけ。

○今村　へえ。

○光島　プレゼンみたいな感じでやっていて、そのときに着物が、布がいっぱい並んでいるコーナーがあって。観客の人にナビゲートするときに、その手触りとかそういうのも伝えてくださいねと言われて。着物を何枚も何枚もちょっと練習で触ったりしていて、やっぱりその感覚が鋭くなってしまって、二、三日かな、四、五日かな、何か指先の感覚がやたらと敏感になってしまって。ちょっとこの前も言ったけど、**手の先の残像**みたいな、**触ったものがいつまでも手の先に残っているみたいな感覚**になってしまって、逆にとってもいろんなものをさわるときに困った。（笑）どう触っていいのかなという感じになって、過敏になってしまったという経験があって、それ以後そんなにはないんですけど、やっぱりそういう刺激を受けてしまうというのはありますね。

○今村　うん。

○門　　ほかの話題はいかがでしょうか。

○伊藤　何か私ちょっと気になったのは、触覚ということで、今回は手のひらでなでるようにという触覚で、基本平面、二次元じゃないですか。それはそれで面白かったんですけど、それがテーブルになっていて、それが三次元になる可能性はないのかなということがちょっと気になっています。というのは、前に大学の授業で「あなたの一番好きな触覚は何ですか」という質問と、「その触覚を別のもので再現するとしたら、どうやれば再現できますか」という質問をしたことがあって、そのときに学生から出てきた好きな触覚って、半分ぐらいは毛布とか猫とか、何かそういう表面の話なんですけど、残りの半分は結構動作なんですよね。ボールペンをカチカチするとか、あと、コーヒーミルでコーヒー豆をひく感触とか、そういう動作に関わるものが結構多かったんですよね。「それを別の触覚で言い換えてください」と言ったときに、同じような触覚に言い換えると案外違うものになっていて、好きは好きでも見ている場所が違うんだなということを思ったんですね。例えば、コーヒー豆をひくとかだと、純粋にひいているぐりぐり感が好きという人もいるんですけど、言い換えたときに、ラジコンとか高圧洗浄機に言い換えている人がいて、それはどういうことかというと、ちょっとの力で大きな成果が出るという感触。

○光島　（笑）

○伊藤　気持ちいいというふうに言っていたんですね。

○光島　へえ。

○伊藤　だから、別に大事なのはぐりぐり感じゃなくて、高圧洗浄機のちょっと水をかけただけですごくきれいになるとか、ラジコンみたいにボタンを押している向こうですごい速さで車がびゅーんと走るとか、手元の労力と結果がすごくずれているということの気持ちよさもその学生の触覚には入っていて、触覚ってすごい奥行きがあるんだなということをそのとき思ったんですね。

○光島・今村　　うん。

○伊藤　そう考えると、動作にまつわる触覚って結構面白いし、日常生活の中で結構動作の微調整とかを触覚でやるじゃないですか。これ以上力を入れたら壊れるなみたいな。結構やっていると思うので、今回のワークショップのそっちバージョンというのも何か見てみたいなというふうに思いました。

○光島　そういう感覚は、そうか、触覚と定義していいわけですよね。

○今村　うん。

○光島　そういう動作、動きにまつわる触覚は、今回ちょっと意識していませんでしたよね。

○今村　うんうん。

○光島　確かにそういう感覚はね。

○今村　確かに日常の中でいう触覚、ふれ心地って、本当にそれだけ存在しているんじゃなくて、いろんな、本当に動いた結果のものだったり、常に意識しなくても触っていたりするので、確かにちょっと切り離して考えていたところはあるかな。そういう動きを伴うとか――動きというのかな。何かそういう要素も、言われると本当にすごく面白いなという。いろいろ可能性があるなと思いました。

○伊藤　単純に今村さんの高いところに設置してある作品というのは、もちろん音は出るんですけど、動きもすごく変な引っかかりがあったりするのもあって面白いんですよね。あれって実は触覚の作品でもあるんじゃないかと思って。

○光島・今村　　ああ。

○伊藤　あの引っかかり感みたいなものをどうやったら光島さんに伝えられるかみたいな……

○光島　ああ。

○伊藤　そういうアートもできるのかなと。

○今村　そうですね。

○光島　ぼくは一応実際にそのものを、後でというか、手の届くところにあるときは触らせてもらったりしたことはあるんですけど、実際にその動きがどんなことになっているのかというのはやっぱり分からないですよね。ちょっとそれをまた言葉で聞いたりすることも必要かなと思ったりしました。

○今村　うん。

○光島　ただ、今、伊藤亜紗さんが「ほかの触覚」と言われたときに、何を言われるかと思って、ぼくはどちらかというと形のほうを言われるのかなと思ったんですよね。その手触りじゃなくて、そのものを触って彫刻とかの形を意識するときも動きが必要だと思いますけど、そちらのほうのことを言われるかと思ったらそうじゃなくて、そういう動かす感覚ですかね、それを言われたのは、ちょっとぼくは思っていなかったことでびっくりしました。

○今村　僕の作品は結構動く作品が多いので、そう言われたら僕もそっちの感覚のほう

が好きかもなというのはちょっと思いました。ちょっと流動的というか、何かその動きと合わさったときだけ表れる感触があるじゃないですか。ずっとそこにあるというものじゃなくて、そのときだけ表れる感触だったりするから、何かそれはいいなという気がしました。

○光島　ぼく、最近ちょっとはまっているのが、スマホのカバーをつけているじゃないですか。

○今村・伊藤　　うん。

○光島　それを時々外したくなるんですよね。（笑）

○伊藤　（笑）

○光島　ぱかっと外してまたはめる。その感覚が面白いというか、何かしたくなるんですよね。別に意味はないのに。着せ替えるわけではないんやけど、１回取ってまたはめてみたいなことをよくしていて、何だろうなとか思いながらやるんですけど、取るときのかぱっと外れる感覚がいいんだろうなと思うんですよね。

○今村・伊藤　　うん。

○光島　そんなことをしています。

○今村　はい。だから、その動きのある触覚というか、分からないですけど**、動作を伴った触覚**でちょっと１つ何か、ワークショップなのか、何かをやってみるといいのかなと思います。

○伊藤　うん、見たいです。

○今村　ここでやったワークショップも、僕と光島さんが一緒に石庭を見に行ってみるとか、何かそういう小さなことをやっていたりするんですけど、その延長線上で少し大きく、人に参加してもらいやすい形を整え、何か自分が今興味あることの実験をする場でもあるのかなみたいなことを思っていて。それが前回はコーヒーとテーブルだったというのが１つで、そこから「動きを伴った触覚」というのがまた新しいワードとして出てきたのであれば、それもまた何かの形にできたらいいのかなという。

○伊藤　うん。

○光島　動くテーブルを作ってください。（笑）

○今村　（笑）本当ですね。どうしたらいいのかまだアイデアがないですね。

○光島　ぼくも分からないけど、何かヒントにはなっていますね、それは。

○今村　うん。ちょっと話が離れるんですけど、僕が言った「開くこと」と「閉じること」ともちょっと違うんですけど、**「個別のこと」と「もうちょっと一般化したこと」**みたいなところの興味で、伊藤亜紗さんはいろんな個人の方をリサーチされて研究されているじゃないですか。

○伊藤　はい。

○今村　その個別のケースというのと、それを一般化することの考え方とかがもしあればというか……。

○光島　聞きたい、聞きたい。

○伊藤　何か一般化、抽象化ということがいろいろ行われていると思うんですけど、その一般化の仕方が、今**当たり前だと思われている一般化の仕方とは違う一般化の仕方を発明したい**なということで、例えば視覚障害というのも１つの一般化の仕方じゃないですか。

○今村・光島　　うんうん。

○伊藤　でも、**別に違う一般化の仕方もあるはず**で。例えば中途障害という一般化の仕方をしたとしたら、目が途中で見えなくなった人と、途中で片足を切断した人が同じカテゴリーに入るわけですよね。

○今村　うんうん。

○光島　ああ、そうです。

○伊藤　そうすると、何か全然違う人のネットワークが生まれて、それまで視覚障害カテゴリーの中で話していた人が、片足切断した人と実は中途障害という意味ではすごく分かり合えるみたいなことが起こるんですよね。さらに、中途障害だけじゃなくて、例えば生活をするときに半分自分で半分自分じゃない存在と一緒に生活をしている人みたいな、例えば盲導犬と暮らしている人と義足を使っている人とか、何かそういうカテゴリーの仕方もあるかもしれないし、天気の影響を受けるとか、何かそういう**一般化の仕方を変えることで、違うネットワークとか、同じ現象でも違う見え方をしてくる**んじゃないかと思って、そういうのを増やしていろいろ柔軟な一般化の仕方をしたいなというふうには思っています。

○光島　なるほど。じゃ、ちょっとそのことと少しずれるかもしれないんですけど、一般化するときの話というか、ちょっと気になるのは、見えない人の割と特殊能力的なことを引き出されている例もあるじゃないですか。例えば、格子状になったところを歩くと縞状に感じる人がいるだったかな。ぼくはそれはないんですけど、かなり特殊な能力とか、そういう感覚を持った人のことを例に挙げたりされている。ぼくもそういうことも、共感覚とかということもそれに属するんですけど、そのときに何かすごい能力というふうなところになってしまうと、ちょっと危険だったりするのかなと思って、いつもちょっとそのことは、自分でも面白いけどどうなんだろうなと迷うところがあるんですけど、その辺りはどんなふうに処理されていますか。

○伊藤　私は、１つの感覚がなくなるとほかの感覚が鋭くなるとか、何か特殊能力が身につくみたいな言説には結構距離を取ろうとしていて、そんなことはないなと思っています。単に捨てている情報を拾っているだけだったり、例えばエコロケーションとかも、本当はみんな聞こえているんだけど、脳がそれを聞いていないことにしちゃっているけど、見えなくなるとその情報を使ったほうがよくなるので使っていくとか、そういうふうに理解しようとしています。むしろ大事にしたいのは、さっきの話じゃないですけど、視覚障害なら視覚障害とざっくりカテゴライズしている人の中にすごい多様性があるということを大事にしていて、例えばさっきの「目の見えない人」というのは「目の」というのがつくという話で、これは一応裏話としては、私が本を出すときに出版社に提示したタイトルは、「見えない人の世界」、「見えない人は世界をどう見ているのか」だったんですよね。

○光島　あ、そうなんですか。

○伊藤　はい、そうなんです。それを編集者が「目の」というのをつけて、それは単に

「見えない人」と言っちゃうと、何か透明人間みたいに感じるからだと思うんですよね。

○光島　ああ、なるほど。

○伊藤　なので、多分つけたんだと思うんですけど、ただ、私は、別の本で使っている表現は「目で見ない人」という表現をしていて……

○光島　ああ。

○伊藤　だから、生理的に見ていた目は使っていないけれども、ほかの触覚を使う人もいれば、聴覚がすごく鋭い人もいるし、逆に、見えないんだけどすごく視覚を使うというんですかね、情報を全部視覚的な表現に置き換えて、なるべくビジュアルで理解したいという人もいて、見えないといっても人によってものすごく違うということを大事にしたくて、それは特殊な例を何点かピックアップしているように、もしかしたら見えるかもしれないんですけど、自分としてはそういう意図があります。

○光島　はい。

○今村　僕がさっき質問させてもらったのは、僕と光島さんの展覧会というか、やっていることというのが、個別のケースが個別のまま、どうやったら個別にとどまらない意味を持つのかなというのが興味のあるところなんです。だから、伊藤亜紗さんがおっしゃった中途障害の話にすごく似ているんですけど、僕は、テキストを書くときに、美術作家２人の共同作業というか、２人とも作品を作っているからできるコミュニケーションという言い方をしていて、そこが見える人、見えない人のコラボレーションという大きい話になり過ぎないほうがいいなと思っていたりします。かつ、美術作家２人だけど、さらにそれよりも狭くて、僕と光島さんのケースという感じで。だから、別の人と別の人のケースだともうちょっと違うやり方があったり、でも、多分どこかで共通する部分、共通するやり方とかが何かあって、それが見えてきたり、伝わったりとかすると、展覧会としてやる価値を持つのかなというふうに思っていたりします。

○伊藤　「点Ｐ」でしたっけ。

○門　　はい。

○伊藤　あれはある意味すごく抽象度が高いと思うんですけど、それはどういうバランスで、今のすごくローカルなというか個別的な話と、「点Ｐ」というすごく抽象度が、匿名性が高いみたいな話とどういうバランスでつながっているんですか。

○門　　高内さん。

○光島　名づけの親。（笑）

○高内　「点Ｐ」は私が考えたんですけれども、まず何でも入るというイメージをしてつけました。いろんな人のいろんな感覚が混ぜ合わされればいいなと。広く拾ってみたい気持ちもあるし、個別のところに戻したい気持ちもあるし、いろんなところから見られることで新しく見えてくるものがあるかなというふうに考えたということもあります。

○伊藤　なるほど。

○今村　ああ、そうか。何か大きい部分と小さい部分とか、抽象化された部分と個別のケースとかを行き来する感覚があるといいのかもしれないですね。実際いろいろやって

いるときには、多分その両方を結構考えながらやっている気がします、今思えば。

○光島　まあ、その辺りちょっと「点Ｐ」と離れるかもしれないけど、難しいところですよね。何か今村さんとぼくとの共通点が、作品を見た結果、ああ、分かったと言ってもらうのもうれしいけど、ちょっとそれでは違うような気がするし。

○今村　なるほど。（笑）

○光島　そこが何か微妙な分かり方――分かり方というか、感動の仕方をしてほしいけど、そこってどうしたらいいんでしょうね。（笑）

○今村　（笑）

○伊藤　でも、さっきおっしゃった代入みたいな感覚は面白いですね。何でも入れられる入れ物みたいにその抽象を捉えるというのは、ある意味すごく開かれているわけですよね。

○今村　そうですね。

○伊藤　何か「私」とかという言葉はすごく面白いなと思うんですけど、つまり誰のことも指していない、かつ、誰のことでも指し得るというか、「点Ｐ」みたいな、私が言うから今この「私」を指しているけど、ほかの人が「私」と言えば違うものを指すわけですよね。だから、言葉としてはある意味中身がないんだけど、だからこそ誰でも何でも指し得るみたいなところがあって、すごく不思議な言葉ですよね。「点Ｐ」的な言葉かなと思います。

（以下略）

終